

● CNC P はあなたが参加し楽しく議論し活動する場です ●

シリーズ 分かり易い土木

第2回 東京湾の埋め立て

第2回は東京湾の埋め立てです。徳川家康が江戸に幕府を開くと大規模な埋め立てが始まりました。もともと東京湾は浅い海でしたので、埋め立てに適していました。

江戸城の堀を作って出た土で埋め立てたのが東京駅の近くの八重洲と言われています。東京湾が東京駅のすぐ近くまで入っていました。勝鬨橋で有名な月島は航路を浚渫した土砂で作られたと言われています。江戸に入ってくる船の航路を確保し、更に住宅地を作ったという事例です。

佃島など逸話も多い島が作られています。徳川家康が本能寺の変の後、岡崎城に逃げ帰るのを助けた大阪佃村の漁民を江戸に招いて、特別の漁業権を与えたと伝えられています。佃島は月島の隣で、図で月島と書いてある付近です。

廃棄物を処理するために埋めたのが永代島と言われています。昭和になってからは「夢の島」に生ごみなどの廃棄物を投入していました。私も小学生の頃に見学に行きました。その跡地は現在「若洲ゴルフ場」になっています。いまだにゴルフ場のフェアウエーからパイプを通してメタンガスが出ています。

江戸時代には焼却処分がない時代ですから大地震や大火の後の震災廃棄物も埋め立てられたようです。

以上

(理事・事務局長 内藤 堅一)



東京湾埋め立ての画像より

Vol.74 コンテンツ

巻頭言	コロナと共に～駆け足でやってきた未来とまちづくり～	三上 靖彦	2
コラム	既に起こっている未来	山崎 晶	3
身近な土木遺産シリーズ	第5回宮崎県延岡市の「五ヶ瀬川の畳堤(たたみてい)」	木原 万里子	4
部門活動紹介	土木と市民社会をつなぐ事業研究会報告	事業化推進部門	6
事務局通信			7

コロナと共に ～駆け足でやってきた未来とまちづくり～

シビルNPO連携プラットフォーム 理事
茨城の暮らしと景観を考える会 代表理事
三上 靖彦



ニューノーマル。今の状態を拒み、戦う姿勢を維持するのではなく、また、台風が過ぎるのをじっと待つのではなく、今の状態を受け入れ、それを新しい生活様式として定着させることが大切になる。しかもそれは、起こる予定だった社会的・経済的变化が、コロナによって結果を早く求めるようになり、早いペースでの変化を余儀なくされただけだ。

「with コロナ」、コロナと共に。時代が大きく動き始めた。その変化はとても速く、私たちは試行錯誤しながら、新しい暮らし方、新しい働き方を始めなければならない。まちづくりの分野でも、暮らし方、働き方の変化をもたらすソフト・ハード両面での変化は大きい。

(1) 今、何が起きているのか

＜オンライン化＞ そのうちそうなるかも知れない、と思っただけだが、宅配や働く現場でも子供たちの教育の面でも、劇的なオンライン化へ。その結果、私たちは、私たち自身の「暮らし」を中心に物事を考え始めることになる。住む場所を選ぶにしても、学校や勤め先が近いから、といった理由ではなく、いかに暮らし易いか。それは「ワーク・ライフ・バランス」ではなく、「ワーク・ライフ・ミックス」の社会だ。

＜ソーシャル・ディスタンス＞ 利便性を優先すれば仕方がない、と思っていた高層高密度な社会から、ソーシャル・ディスタンスや外気を意識した環境整備へ。その観点で人々が暮らす地元を再整備する必要がる。車道を減らし、社会的距離の確保のために歩道と自転車道を広くとる。現在国や地方自治体で進められているコンパクトシティの

政策を進めつつ、一極集中型の高層高密度から多極分散型の低層低密社会へ。

＜地産地消＞ 原材料と人件費の安いところで製造し、それを安く輸入するのが当たり前だったが、安全性を含め、大切なものは多少割高でも地産地消へ。グローバル経済から、地域が自立して連帯する地産地消中心型へ。国内で流通消費できる体制を整え、自給自足と供給網の国内回帰が激しく進む。

(2) 「まちなか」はどうか

物販の小売店でも、他から仕入れて、その上に手間賃を乗せているだけのお店は、ネット通販には敵わない。簡単だし、安いし、配達もしてくれる。徹底的にネットで済むことはネットで、の社会が到来。飲食店は、テイクアウト型に大きくシフト。そもそもテイクアウトの仕組みが作れないお店はその時点で続かない。テイクアウトを始めても、実は客は、続いて欲しいお店を選んで応援する。時間を掛けて、わざわざ行くだけの価値のあるお店、手づくり感・手触り感のあるお店のみが生き残る。

(3) バックカスティングでまちづくりを

地方分散型・低層低密のネットワーク型社会で、日常の殆どをオンラインで済ませ、人々の移動は、特別の時、特別の場所に限られる社会。優先順位が一番は「暮らし」。抜本的に世の中が変わると覚悟して現状維持とか原状回復とかは考えずに、今までの当たり前から切り離して未来を描き、バックカスティング方式で「特別な選ばれる場所」づくりを目指したい。

既に起こっている未来

シビルNPO 連携プラットフォーム 理事
 (株)熊谷組常務執行役員 国際本部長
 山崎 晶



4月に所属会社の国際部門の責任者に就任した。その矢先のコロナウイルスである。渡航者や帰国者の隔離措置、入国や渡航の制限や禁止措置、定期航空便の減少や就航中止、都市封鎖や国内便・国際便の発着禁止、日本の政府開発援助の窓口である国際協力機構の現地日本人職員の帰国、こうした状況が各国で起きている。我々の主な事業展開先であるアジア諸国、各国はどのようにコロナウイルスに適切に対処するのか、現地の医療事情の貧弱さをどのようにリスクヘッジするかなど、今後の避けて通れない様々な問題が懸念される。

国内でも緊急事態宣言が発令され、外出自粛が要請され、テレワークによる在宅勤務、訪問や出張禁止など、業務を取りまく状況が激変している。在宅勤務実施のため各人の業務内容や役割を確認したら、特にそうしたものは決めていなかったなどの笑えない話も聞く。往来でのコミュニケーションが取れなくなり、ウェブ会議などが日常化して、食わず嫌いの ICT 技術も使ってみると中々のものであることにも気づかされている。今まで当たり前だと思っていた仕事やそのやり方も見直すべき機会とを感じる。

日常の生活も大きく変わった。飲み会が減り血液検査の結果が劇的に向上した、GW に家族の元に帰れず単身赴任先で引きこもっている、など些細なこともある。しかし、今まで同様に皆で豊かさを求めて、与えられた仕事を良かれと思ってこ

なし、やりがいと給料を得て、衣食住や旅行などを楽しむ生活を満喫する、こうした日常のあり方を再考する人もいるのではないだろうか。生きるとはなにか、繁栄とはなにか、幸福とはなにか、そして仕事とはなにか・・・にまで繋がっていく問いのようにも感じる。

「苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていく事が、これからのわたくたちの使命です」、これは東日本大震災直後の被災地のある中学校の卒業式での卒業生代表の答辞だ。当時の状況は今の状況とは比べ物にならないくらい厳しいものであり、この言葉は今の我々に大きな勇気を与えると共に、与えられた状況で精一杯がんばれとの覚悟を要求してくる。

経営学者 Drucker は「既に起こっている未来を見過ごさず、その兆候を仕事や組織に取り込み、それが指導者の役割だ」と言っている。これに従うと、我々の営為や仕事でも、今回のリスクを放置して結果の悪さをコロナウイルスに転嫁し責任逃れをするのではなく、リスクをチャンスと捉えて、新しい取組みを構築する必要があると感じる。しかしながら、自分の経験や実力不足のために、中々具体的な考えや取組みに結び付いていないもどかしさを感じる。

コロナがある程度収束したら、CNCP の先輩諸氏とこうしたことを様々意見交換して、ご指導を頂きたいと考えている。



街なかの土木遺産 宮崎県延岡市の「五ヶ瀬川の畳堤(たたみてい)」

五ヶ瀬川の畳堤を守る会 会長
木原 万里子

宮崎県延岡市は宮崎県の北部に位置し、西に高千穂溪谷、東に日向灘に囲まれ、旭化成を中心に発展した人口12万人の地方都市です。

水郷延岡と称されるように、市内には五ヶ瀬川、大瀬川、祝子川、北川と大きな川が4つあり、そのうち畳堤のある五ヶ瀬川の源流は宮崎県と熊本県の県境にそびえる向坂山です。この川は延岡市内に入ると分流して五ヶ瀬川と大瀬川となり、市街地を貫流した後、河口近くで再び合流します。

この2つの川に挟まれた中州のほぼ中央、小高い山に最初の城主「高橋元種」が城を築き、政治、経済、文化が発達してきました。延岡の町は川によって造られた、といわれる所以です。

しかし、ひとたび豪雨が降ると、4つの川の水が一気に河口に流れ込みます。河口が小さいため、流水が膨れ上がり、水位が増し市街地は幾度も浸水被害を受けてきました。

五ヶ瀬川の「畳堤」は浸水被害から市街地を守るために造られた施設です。高さ60cmの橋の高欄に似たコンクリート製の枠が堤防上に連なり、上から見ると幅7cmの隙間が空けてあります。この隙間に畳がすっぽりと入ります。台風などで川の水が堤防を越える前に、畳を立てて洪水を防ぐ目的で造られました。ただし、戦災により街は焦土化し資料が残っておりません。

現在「畳堤」は、五ヶ瀬川沿いに、延べ980mが残っています。

昔は大瀬川沿いにも設置されており、総延長は2000mで、畳をはめ込むと約1000枚の畳が必要だったと言われています。



赤-現存する畳堤 緑-過去に畳堤があった場所

全国的には、岐阜県岐阜市の長良川と兵庫県たつの市の揖保川にも畳堤があります。

長良川が昭和11年、揖保川が昭和25年に施工されました。五ヶ瀬川の畳堤は大正末期から昭和初期に造られたことが分かっており、日本最初に建造された畳堤と推定されています。



畳堤竣工時の写真



畳堤に畳を差し込んだ状態

当時の一般家庭では江戸間(長さ176cm 幅88cm)の畳が使用されており、川岸の住民が自分の家の畳を持ち出し畳堤に畳を差し込み越水を防いだと伝えられています。畳は一度水を含むと乾いても使用できなくなってしまう。川岸の住民が自分を犠牲にして街の人々を守ろうとした地域愛や皆で助け合う心が伝わってきます。これこそが防災の心です。

私たちは「畳堤」を地域防災のシンボルとして守り、保存し、洪水の被害から街を守ろうとした昔の人々の知恵や工夫を見直し、畳堤に込められた「自助・共助」の精神を広く伝えたいと平成13年に市民グループ「五ヶ瀬川の畳堤を守る会」を設立しました。以来、様々な活動を行っていますが、その内容の一部をご紹介します。

畳堤の自助・共助の精神を未来につなぎ、地域防災のシンボルとして守り、保存する活動として、毎年市主催の「防災フェスタ」に参加し子どもたちに紙芝居やぬり絵等で先人の思いを伝えています。

定期的に畳堤の清掃活動を行い、定期的に見学、触れられる環境づくりを行っています。

また先年、国交省の事業で畳堤のある堤防が補強拡幅され、非常時には防災道路、普段は畳堤散策路として利用できるようになりました。そこで今回、初の「水辺の青空美術館」を開催することができました。



水辺の青空美術館と防災道路

さらに、100年先の後世に「畳堤」の教えを伝えるために、等身大の石像を作って設置しました。



畳堤に畳を差し込む等身大の石像

様々な活動に対し下記のとおり表彰を受けております。

- 平成22年河川功労者表彰。
- 平成26年水防功労者国土交通大臣賞
- 平成27年土木学会選奨土木遺産認定



土木学会選奨土木遺産認定

水辺の青空美術館は、今年も11月1日～12月20日50日間、実施する予定です。ご覧いただければ幸いです。

土木と市民社会をつなぐ事業研究会報告（その2）

第5回研究会において第6回研究会からはブレーンストーミングの結果を受けて「インフラメンテ」、「災害対応」、「地球環境・エネルギー問題・廃棄物対応」、「中央と地方との格差対応」、「国や地域の将来ビジョン」を社会的課題として毎研究会で一つずつ取り上げてこれらの課

題をCSV注釈)の視点で探って行くこととしましたCNC P 通信(Vol170)で報告した(その1)に引き続き報告(その2)では第6回研究会において取り上げた課題は「インフラメンテ」の報告です。事前にメンバーから提出頂いたメモは下記の12件でした。

	仮 題	提 案 者
①	インフラリスクの数値化	岩坂 照之 (前田建設工業)
②	IM事業の民営化	上田 賢司 (西松建設)
③	IMへの新事業化	岡村 正典 (奥村組)
④	インフラ診断のプラットフォーム	松田 和繁 (熊谷組)
⑤	地域インフラのマネージメント	山崎 晶 (熊谷組)
⑥	自治体のIM事業支援	加古 慎 (鉄建建設)
⑦	自治体のインフラ更新事業	酒井 喜市郎 (鉄建建設)
⑧	自治体の構造物調査	同上
⑨	空き屋・遊休農耕地の再利用	同上
⑩	IMへの協働推進	田中 努 (CNC P)
⑪	IMへのセオリーオブチェンジ	辻田 満 (CNC P)
⑫	広島版グリーンIM事業	野村 吉春 (CNC P)

提出されたメモの分析・評価を行った結果、下記の5つのプロットモデルに整理されました。

事業モデルA;インフラ診断のプラットフォーム事業

事業モデルB;インフラメンテの包括民営化事業

事業モデルC;インフラメンテの協働推進事業

事業モデルD;公共施設・空き家等の利活用活性化事業

事業モデルE;流域圏のグリーンインフラ・メンテ事業

本来ならばここでA~Eの5つのプロットモデルについてそれぞれ更に具体的な事業としての組み

立ての検討に入るべきところだとは思いますがここで一旦その作業は留めておいて次の課題の検討に入ります。そして前述した5つの全ての課題が一巡した段階で、更に各課題に対する事業化への取り組みを研究します。次回の第7回研究会のテーマは「防災対応への貢献」とします。

なお、CSVの視点とは①CSV活動領域 ②社会的価値提案モデル ③収益モデル ④取り組みの連携・協働の4つの切り口です。

注釈:共通価値の創造(CSV)とは社会的課題を工夫のある事業で解決を図ると共に合わせて企業価値の向上を図る事業を称します。

緊急企画 紙上ワークショップ “With コロナ” のシビルNPO を考える

今般の新型コロナウイルスのまん延は、私たちの社会や暮らしに、かつてないほどの大きな変化をもたらすものとみられています。この変化に対して、シビルNPOはどのような役割を果たすべきか？

別紙の要領にて、みなさまのご意見をお寄せください。

6月からシビルNPO連携プラットフォームの活動を再開します。

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中で、CNCNの定例会議を中止していました。

連絡調整会議は3月から5月の定例会議を中止しました。

運営会議は、3月、4月はメール会議を行いました。5月は、4部門の内3部門が活動を停止していることから、企画サービス部門と事務局の報告をDropboxに掲載して確認しました。資料は運営会議記録として残しました。運営会議の議事録と資料はホームページの会員専用ページで見ることができます。

緊急事態宣言が解除になりましたので、徐々に活動を再開します。

この間もCNCN通信は、執筆者のご協力により発行を継続できました。

事務局通信

6月の会議予定

6月2日(火) 15:00~17:00 : 連絡調整会議 WEB会議

6月9日(火) 13:10~15:00 : 運営会議

6月9日(火) 15:00~17:00 : Meeting (集中討議)

6月1日現在の会員数

法人正会員 16、個人正会員 32、法人賛助会員 29 合計 77

サポーター132

事務局

お問い合わせは
こちらまで

特定非営利活動法人

シビルNPO連携プラットフォーム

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町三丁目13番地7

名古屋ビル本館2階 コム・ブレイン内

事務局長 内藤 堅一 : info@npo-cncn.org

ホームページ URL : <http://npo-cncn.org/>